

The Old Gang

TFTRDH

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

聖グロリアーナにTOGG2*が導入されるお話。

目次

第一話 「入学です！」	1
第二話 「永遠のTOGの中で」	6
第三話 「ロイヤリスト」	12
第四話 「筆頭元帥」	16
第五話 「札幌の会見」	38

第一話 「入学です！」

「この中に戦車を所有されている方はいらして？」

聖グロリアーナ女学院戦車隊長ダージリンの美声が響き渡る。

ここに集う乙女の中には中学生時代から戦車道を嗜む者も比較的多いものの、流石に個人で戦車を所有する者はそう多くはない。戦車道と言う競技の存在故個人の戦車保有は許されており戦車の流通もそこそこ有るが、その保有や維持には面倒がつきものなのだ。だが、流石は戦車道でも名を馳せる名門校の乙女たちだ。ちらほらと掲げられた手が見える。

「まあ、今年の新生は豊作みたいね。」

ダージリンがそう独り言ちると、

「データによれば中学戦車道で使用する戦車の約32%はドイツ製となっております。我が校で使用出来る戦車は少数かと。」

とアッサムが返す。

「ちなみに、残る34%はソ連製、20%はアメリカ製、残る14%に英国は含まれま

す。」

聖グロリアーナ女学院は英国文化を色濃く伝える学校であり、戦車道に於いても英国製の戦車が使われている。戦車と言えばドイツとソヴィエトの2強と相場は決まっているのだが、もちろん英国にも優れた戦車は存在する。現在聖グロリアーナ女学院では、主にチャーチル・マチルダ・クルセイダーが主力として使用されているが、強力な重戦車を保有するプラウダや黒森峰と言った強豪校に対しては些か非力であることは疑いようもなかった。故にダーズリンを含めた歴代の隊長は強力な戦車の導入を強く望んできたのだが、聖グロリアーナ女学院においてはOG会の力が強く、そうした試みは殆どが頓挫させられてきたのである。そうした状況に在ってダーズリンが打ちだした手の一つが、私有戦車の導入である。戦車道連盟の児玉会長が後に明言したとおり、高校戦車道でも私物の戦車の使用は認められている。そこで、生徒達が持つて居るであろう私物の英国戦車を部隊に組み込んで使おうというのだ。戦車の購入と違い、金を出すOG会からの干渉を抑えやすいとの目論見から発案されたのだが、個人での戦車保有率から考えるといくら裕福な生徒の多い聖グロリアーナではあってもあまり成果の出そうな案とは言い難かった。

「ダーズリン様、新入生のうち戦車を保有する者は12名、うち英国戦車は3両です。」
「こんな言葉を知ってる?」戦車は天から降ってこない。自分で導入しなければなら

ない。」のよ。」

なお、現時点でオレンジペコはノーブルシスターズには加入していないので、突っ込み役は不在である。

「具体的には、FV214コンカラー・AIE1インディペンデンスそしてTOG2*になります。」

「まあ、素敵な戦車ばかりね。でも、コンカラーが使えないのは残念だね。」

「ですが、17ポンド砲を装備するTOG2が加わるのは大きいかと。」

実際現在の聖グロリアーナ女学院の主力火砲は2ポンド砲と6ポンド砲で有り、独国製最新鋭超重戦車「虎」の正面装甲を遠距離から貫くことが出来る17ポンド砲を搭載した戦車は喉から手が出る程欲しかったのだ。

「チャーチル・ブラックプリンスが有れば良かったとお思いですか？」

「卒業する時にはお返ししなければいけないでしょう？それに高望みはよくないわ。「今日なし得ることに全力を注げ。」まずはあの子達を使い物になるようにしましょう。」そう言いつつスコーンに手を伸ばすダーズリンであったが、微妙に残念そうな表情をしているのは付き合いの長いアッサムには隠し切れていなかった。

「わっがひのもおとはしーまぐによ〜」

やや調子の外れた横浜市歌を機嫌良さそうに歌いながら学園艦を歩くのは、今年入学したばかりの戦車乗り、横浜花子である。聖グロリアーナのタンクジャケットに憧れて入学した彼女は今人生の絶頂に居た。なんと、私物として所有していたTOG2*を、これまでチャーチル・マチルダ・クルセイダーしか使用してこなかった聖グロリアーナでも使用することが許されたのである。これを望外の喜びと言わずしてなんと言おうか。

彼女がTOG2*を持っているのは実はそれほど意外なことではない。WWIで戦車を開発した戦車開発チームによって作られたTOG2は、戦友たるウィンストン・チャーチルのごり押しによって少数ながら先行量産が行われていた。結局軍はTOG2を受け入れはしなかった物の、TOG2の抜きん出た不整地走破性能は注目され、農業用トラクターとして一時は出回っていたのである。なので、TOG2はボーピントンに一台しか存在しないわけでは無く、手に入れようと思えば手に入る、そういう車両だ。彼女がTOG2と出会ったのは2年前の初夏の事だった。軍事マニアの父に連れられて英国旅行のついでにボーピントンのタンクフェスに参加した彼女は、そこに鎮座する1台の素晴らしい車両に目を奪われた。それは戦車と呼ぶにはあまりに偉大で大きく、そして長すぎた。それはまさに英国面そのものだった。

TOG2の圧倒的な存在感に心を奪われた花子は、しばし放心し、そしてその場から

動こうとはしなかった。閉館時間が過ぎても動こうとはしなかった彼女を警備員が排除しようとしたとき、奇跡は起こった。暗くなった館内に突如として流れ始めた007のテーマ曲とともに、ゆっくりと走り込んでくるロールスロイス装甲車。もちろん乗っているのは英国紳士の中の紳士だ。彼は問う。

「美しいお嬢さん、TOGは好きかな？」

「はい、とても。」

「TOGの何処が好きかな？」

「長いところ。」

「あなたは動かないときも撃破されたときも、TOGを永遠に愛すると誓いますか？」

「誓います。」

思えばこの出会いは必然だったのだ。横浜港に1台の戦車が届くのは、その半年後の話である。

続く

第二話「永遠のTOGの中で」

聖グロリアーナ女学院戦車隊隊長ダージリンの懐刀オレンジペコは、演習場に一步足を踏み入れたとたん思わず立ちすくんだ。TOG2*が圧倒的な重量感で彼女の全身を押しつぶしたからだ。

隊長のダージリンは、ティーカップを傾けて、演習コースで訓練をこなすTOG2*にじつと見入っていた。

「TOGを見ておいでですか、ダージリン様。」

「ええ、TOGは良いわ。何事にも動じず、いつもじつと橋の上で耐え続けて私たちを守ってくれる。」

「はい。あのTOGに比べれば、私たちの戦車は小さなものなのかもしれません。」

ダージリンとオレンジペコの視線の先では、新入生の乗ったマチルダやクルセイダーに混じって、TOG2*がその巨体で練習コースを塞いでいた。実際全長10mを誇るTOG2に比べれば、マチルダやクルセイダーは小さいのである。

強力な新戦車導入に際し、聖グロリアーナ戦車隊は色めきたった。わけでもTOG2

*は、現在聖グロリアーナに所属するどの戦車よりも大きく、重く、チャーチルの次に厚い装甲と最強の火力を持ち、どの戦車よりも遅いという優雅さを兼ね備えた最高の戦車だ。車長には一体誰がなるべきか。聖グロ最強の主砲となった17ポンド砲の砲手は誰が勤めるべきか。操縦手はどうする。これまでよりも重い砲弾の装填手は。

「TOG2*の車長は本郷さん。インディペンデンスの車長は石川さんにお願いますわ。操縦手はそれぞれの持ち主で、後は適当に1年生を引き抜いて。1年生の指導、しっかりとお願いしますわ。」

隊長であるダージリンの方針は既に決定していたが、当然の如く隊員達からは異議が唱えられる。

「そんな、こんなにも優雅で強力な戦車を1年生に乗らせるのですか？持ち主はともかく、他は納得できません。宝の持ち腐れになります。」

「さて、戦車の事を一番よく知っている持ち主こそ車長にするべきだろう。それが操縦手というのはどうなんだ。」

「とろすぎて紅茶をこぼさずに済みそんな戦車ですわ。ダージリン様にお似合いですの。」

「残念だけど、今の状況ではこの2台の公式戦への参加をお姉さま方がお許しにならないわ。だから、原則として2年生は乗せられませんの。本郷さんと石川さんには悪いけ

れど、1年生が来年度以降公式戦に出られるように鍛えて欲しいの。それから、操縦手はその戦車を一番上手く扱える方が勤めるのがよろしいのではなくって？」

「それから、車長になった二人には名前を差し上げないければならないわね。今後本郷さんはリプトン、石川さんにはつと・・・トワイニングと名乗りなさい。」

「へっ？」

生涯二度と見せることの無いような間抜け面をさらした女学生が2名そこにはいた。周囲のメンパーも顔こそ平静を保っているが、明らかに目が笑っている。それもそうだが、名誉ある紅茶名を頂けると思いきや、リプトンだのトワイニングだのとは。確かに紅茶に関係ある名前ではあるがあんまりではないか。そこにそつとアッサムが耳打ちする。

「ダージリンは新戦車の車長を務める荣誉と、公式試合に出られないであろう貴方方のことを慮ってニツクネームを授けました。同時に貴方方が不当な妬みにさらされないように配慮して微妙な名前を選ばれたのですよ。」

「でも、さつき日東って言いかけてました・・・。」

「気のせいです。ダージリンが面白がって微妙な名前を選んだなどということはありません。いいですね？」

「アッハイ」

かくして、新戦車2両は何事も無く聖グロリアーナ女学院の戦車隊に迎え入れられたのである。

「おい、そのTOG2*！マチルダ隊に遅れているぞ！隊列を崩すな！」

「すみません！」

最近良く見られるようになったのが、TOG2*に向かって叱責を飛ばすルクリリの姿である。聖グロリアーナ女学院の戦車道は、戦列歩兵さながらの見事な横隊を形成しての平押しを特徴とする。TOG2*とインディペンデンスは歩兵戦車としての特性からルクリリ率いるマチルダ隊に配置されることになったが、鈍足で鳴らすマチルダ(24km/h)と比較してもTOG2*(13km/h)は遅すぎた。一方不整地走破性能はTOG2*の方が圧倒的に上である。こんなにも速度差があつては統一された行動など不可能といつても良い。単独での練習ではすばらしい性能を示すTOG2*も、集団での練習に移るととたんにその馬脚を現した。慣れないながらも隊形を必死に維持するマチルダ隊の新生生の中にあつて、TOG2*は全く陣形を維持できずに脱落していた。

新生生の訓練も進んできたある日のこと、ルクリリは意を決してダージリンにその点

を相談することにした。

「ダーズリン様、意見具申を許可して頂きありがとうございます。」

「ルクリリの言いたいことは分かっています。TOGが遅すぎる、そのことに私の注意を喚起したいと言うのでしょうか。」

続いてTOG2*の車長であるリプトンが補足する。

「左様です、ダーズリン様。TOGに対してマチルダの速度は約2倍です。しかも不整地では機動力が逆転します。これは統一された行動が不可能であることを意味します。」

「つまり、どうしろと貴方は言いたいのかしら？」

「僭越ながら申し上げます。TOGはインディペンデンス共々、速力・不整地走破性能共に近いチャーチル隊に所属させたほうがよろしいのでは？」

数日後

「リプトン、トワイニング。貴方達をマチルダ隊から外します。貴方達は今後、私の直属として動いてもらいますわ。」

「はい。ダーズリン様。」

これまでの練習の結果、TOG2*がマチルダ隊に所属するのは不都合が多い事が判

明している以上、TOG2*がマチルダ隊から外されるのは妥当な判断といえた。

TOG2*の持ち主であり、操縦手を勤める横浜が質問する。

「ダージリン様、今後TOGとインディペンデンスはチャーチル隊に所属するということでしょうか？」

「違いますわ。」

「しかしダージリン様、インディペンデンスはマチルダ隊との共同訓練で特に問題ない成績を残しています。TOG2はともかく、インディペンデンスを外す理由は何でしょうか。」

インディペンデンス車長のトワイニングの質問に答える形でダージリンが答えを明らかにする。

「TOG2とインディペンデンスで独立した部隊を組んでもらいます。指揮官は私、部隊名はHome Fleet^{本 艦 隊}でどうかしら。」

これ以上無いドヤ顔で部隊名を披露するダージリンを見てトワイニングは悟った。陸上戦艦つてことですね、と。

第三話「ロイヤリスト」

TOG2*を始めとする英国の誇る歩兵戦車が並ぶ中、今日も赤いタンクジャケットに身を包んだ少女達が訓練に励んでいる。但し、汗一つ流さず優雅にだ。

「TOGを夏の日に例えようか。いや、TOGの方がずっと美しく、穏やかだ。・・・」
「シェイクスピアですか？ダーズリン様」

毎度お決まりのダーズリンの世迷いごとに、些か呆れた顔をしたオレンジペコが律儀に合いの手を入れる。いつものように紅茶を手にしたダーズリンが指揮し、アツサムがドラムを叩き、オレンジペコが旗を持つ前で、聖グロリアーナ女学院戦車隊の面々は、一糸乱れぬ横隊を組んで行進していた。一見戦車道とは関係ないように見える光景だが、こうした訓練は聖グロリアーナ女学院の戦車道において重要な位置を占めている。生身で隊列を組むことすら出来ない者が、戦車に乗って隊列を組むことが出来るだろうか？否！断じて否である！故にこそ、聖グロリアーナ女学院の戦車道は、行進に始まり、行進に終わるのだ。

号令と共に横隊が停止し、各員が射撃姿勢をとる。どこかで見た事があるような茶色

の服を纏った人型標的までの距離は僅かに50歩程だ。

「Make ready!」

「First line, fire!」

「Second line, fire!」

号令一下、赤いタンクジャケットに身を包み、模擬銃を構えた生徒たちが一齐に発砲する。緊張のあまり新入生が外れたタイミングで発砲した音が散発的に聞こえてくるが、よく訓練された上級生の行う一斉射撃の音は何とも心地の良い物だ。

「そろそろスコーンが割れる頃合いね。Fix bayonet!」

「Charge!」

楽隊の演奏とダージリンの号令に従い、これまでの優雅で整然とした様子とは一転、赤いタンクジャケットに身を包んだ少女達が喊声を上げて突撃を開始する。お嬢様学校とは一体何だったのか、優雅とかお淑やかとかさういった言葉をかなぐり捨て、人型標的に襲いかかる少女達。特にどこかの大学附属高校に恨みがあるわけでは無いのだが、哄笑をあげて狂ったように何度も標的を銃剣で刺突する様はとても親御さんには見せられない光景だ。聖グロリアーナ女学院はお嬢様学校であつて、^{British} ^{Grander} 英国擲弾兵の養成校では無いはずなのである。

さて、良くも悪くも聖グロらしい訓練が終了した後、殆どの隊員は自分の戦車に向

かつてゆくが、例外も存在する。訓練中隊列を乱した者や無断で発砲した者、突撃の際に勇気を欠いた者はその日中は戦車に乗る事を禁じられ、弾薬を担いで演習場を走る罰が与えられるのだ。これは毎年の1年生の通過儀礼のような物で、何人もの1年生と少数の上級生が2ポンド砲弾や6ポンド砲弾を担いで走り出していく。が、今年は少々様子が異なった。そう、TOG2*の乗員達である。TOG2*はマチルダやクルセイダーとは違い17ポンド砲を装備しているが、17ポンド砲の徹甲弾の重量は8kg近く、僅か1kg程度の2ポンド砲弾や3kg程度の6ポンド砲弾に比べて格段に大きく、重い(※1)。ましてこの訓練の趣旨から、砲弾単体では無く弾薬筒をまるごと抱えて走る事が要求されており、走者の列から明らかに脱落していたTOG2*の乗員達は抱えている弾薬の大きさも相まってとても目立っていた。

「皆さん頑張ってください」

「洋子さんは装填手だけあって流石に慣れていらっしやいますね」

「.....」

集団からは後れつつも、先頭を走って乗員達を励ますのは装填手の杉田洋子。中学の頃から戦車道を嗜んでおり、装填手として普段から17ポンド砲弾を扱っているため比較的余裕がある。続いて走る砲手の港南(みなと・みなみ)も、中学時代からの経験者であるため言葉遣いを崩さない程度の余裕はあるようだ。逆に操縦手の花子はしゃべ

る余裕も無い。TOG2*はハンドル操作のディーゼルエレクトリック方式なので、縦に比較的力量が要らない事が仇になったのだ。

「そろそろあの子達も練習試合に出しても良い頃合いでは無いかしら」

「基本的な動きは出来るようになりましたけれど、ダーズリン様のお供をさせるにはまだ早すぎますわ。」

ティーカップを片手に訓練を監督しながら、そろそろHome Fleet本 艦 隊の面々をお披露目できないかとダーズリンは思案していた。気分は新しい玩具を見せびらかしたい子供の心境である。車長のリプトンは当然のように反対するが、今はちようど良い練習相手からの練習試合の申し込みがある。

「練習試合と言えば、最近戦車道を復活させたばかりの学校から練習試合の申し込みがありましたね、ダーズリン。そこならば新入生の相手をさせるにはちようど良いですが」

「大洗には私がルクリリ達と直接出向きますわ。」

「ではまさか・・・」

まさかの対戦相手にアッサムが戦慄する。

「・・・札幌市立 幌市露譜高校！」

次回に続く

第四話「筆頭元帥」

札幌市立 幌市露譜高校ほろしるふ、かつてフルシチョフのスターリン批判により要職を追われて日本に亡命した旧スターリン派が札幌市に設立した学校である。当初は日本におけるスターリン主義教育の拠点として機能していたが、ブレジネフ体制下で本国との融和路線に舵を切り、最終的にソ連崩壊による財政難で札幌市に委譲され、今ではプラウダの姉妹校として船酔いで学園艦生活を送れない生徒を受け入れている。今日日珍しい陸上にある学校の一つで、諸般の事情により戦車道大会には参加していないため知名度は低めだが、姉妹校としての関係を生かして毎年大会の時期になると相当数の部員がプラウダへの短期転校を行って事実上合同で参戦しているため、その実力は相当な物だ。

幌市露譜高校戦車道チームの使用するガレージの前には、肩を寄せ合い空の彼方を指さすレーニン、スターリンとヴォロシロフの巨大な銅像が立ち、広大な訓練場を睥睨している。今日はその前に、巨大な戦車と隊員達が並び、部隊長による訓示が行われていた。

「聞け！同志部長陛下のお言葉だ！」

騒めきが静まった部員達を前に、一際大きな戦車の上に立つ部隊長が檄を飛ばす。

「昨年の全国大会におけるプラウダの勝利は、科学的社会主義の優位性とソヴィエト軍事科学の優秀性を証明した！黒森峰の無敵神話が崩壊して以来、各校は打倒黒森峰を掲げ戦力の増強に励んでいる。無論我が校も例外では無い。かつてソ連をして、この世界の支配者と成した奇跡の技と力を我らは復活させた。私に従う者には、もはや黒森峰に怯えぬ世界を約束しよう！」

部員達が一齐に立ち上がり、万雷の拍手と喊声をもつてこの宣言を迎えた。今眼前に居並ぶ重戦車群がその言葉の証明だ。かつてクリーク元帥の命によつて開発が進められた鉄の猛獣たち。状況の急変により開発は中止されたが、もし順調に開発が進展していればティーガーショックなどと言う物が起こることは無かつたであろう。それらが今や、聖グロリアーナ女学院の戦車隊に向かつてその牙を振るおうとしていた。

一方の聖グロリアーナ女学院である。ダーズリンがルクリリ達マチルダ隊を率いて大洗との練習試合に向くことになったため、幌市露譜との練習試合にはローズヒツプが部隊を率いて臨むことになった。演習場の地図を広げて参加部隊員達を前にローズヒツプが作戦を説明する。

「今度の相手の幌市露譜高校は、毎度性懲りも無くスチームローラー作戦を使つてくる所ですわ。プラウダと違って柔軟性に欠けてますから、最初の突撃を躲してしまえば

「後はクルセイダー隊でかき回せるのですわ」

やや手狭な演習場の中央には川が流れており、南北二カ所に仮設道路橋が架けられている。春の雪解けで川は増水しており、さらに中央に広がる沼地の部分を除いて急傾斜の河川堤防で固めてあるため、渡河できる場所は無いと考えて良さそうだ。聖グロリアーナの初期配置は黄色丸、幌市露譜の初期配置は赤丸の地点である。

「アッサム様から頂いた昨年までのデータですと、数両KVが有る他はT―35とT―28が主力ですから、クルセイダーだけでも楽勝ですわね。ちょうど今、札幌市は雪解けで演習場がぬかるんでいる時期ですから、この時期にKVがまともに動けるルートは演習道路の周りだけですわ。ですから、F3かI6辺りで拘束してしまえば、突っ込んで攪乱しているうちにD4に陣取らせたTOGの砲撃で側面を狙撃できますから、KVでもイチコロですわね。前線を食い破れば後はフラッグ車まで一直線ですわ！」

普段の言動で忘れられがちだが、ローズヒップは学業優秀で頭は良い。クルセイダー隊の隊長を任されているだけのことはあり、戦術眼も確かだ。これで普段の言いがもう少し落ち着いていけば、大洗に連れて行ってもらうことも出来ただろう。

「ローズヒップ様、聖グロリアーナの戦車道は陣形と優雅さを保つてこそ。そのよう

な戦術はダーズリン様のお叱りを受けてしまいますわ」

インディペンデンス車長のトワイニングから異議の声が上がる。普段から機動力を生かした作戦行動が当然のクルセイダー閥と違い、彼女にとっては考えに上ることすら無い作戦だろう。

「クルセイダーにはクルセイダーの戦い方という物がありますの。そういうのはお遅いチャーチルとマチルダに任せておけばよろしいのですわ」

「げげっ、マジですか?! 皆KVだなんて聞いてませんですわ!」

演習当日、目の前に並ぶ幌市露譜高校の戦車を見てローズヒップは叫んだ。今日の前に並ぶのはフラッグ車のT-35を除いて皆KVだ。通常の交戦距離では、クルセイダーの6ポンド砲での撃破は些か厳しい。乱戦に持ち込んで至近距離から弱い所に打ち込むか、それこそTOG2*の17ポンド砲に頼るしか無いだろう。しかも、お馴染みのKV-1, KV-2の他に見たことも無い巨大なKV戦車が並んでいた。

「審判さん、あのKVを使うのは問題ありませんの?」

一際大きい戦車を指さしながら、審判に異議を申し立てる。なんせ、そこに並んでいるのはKV-220ことОбъект220が2両に、KV-5が1両なのだ。こんな戦車World of Panzersの中でしか見ることは出来ないだろう。

審判が口を開く前に、幌市露譜高校の部長が割り込んできた。

「KV—220は試作車2両分がレニングラード防衛戦に参加しているから問題ない。KV—5も1941年の時点で試作車両の部品製造が始まっているから問題ないとロシア戦車道同盟で判断された。これを見給え」

勝ち誇った顔で1冊の書類を突きつける。

「何々、戦車道技術適合基準証明。……この戦車は1941年時点の赤軍装甲規格を満たした材質で製造されています。……ウラルワゴン工場、ロシア戦車道同盟。随分と灰色な代物ですわね」

「言い掛かりは止して貰おう。これは文科相の承認も受けた正式な物だ」

雲行きが怪しくなりかけた所で、審判がその空気を強引に打ち切る。

「もうよろしいですね。それでは試合を開始します。一同、礼！」

審判の合図と共に双方のチームが初期位置への移動を開始する。今回の練習試合は公式戦の規定に合わせ、参加車両数10両のフラッグ戦だ。なお、敵のフラッグ車のT—35に対抗して、此方のフラッグ車をインディペンデンスにすることにした。

「さあ、気を取り直して始めますわよ！ちよつと敵の編成が予定よりも重いですけど、近寄れば抜けますからやることは変わりませんわ。むしろ、デカくて遅くなった分当て

やすくなったと思えば良いのですわ。バナラと克蘭ベリーは予定通り南北の橋を通過して索敵、TOGはD4の射点に移動、他は私に続いてC7まで前進ですわ」

似たもの揃いのクルセイダー隊は敵の陣容に特に萎縮すると言うことも無く、ローズヒップの指示に従い部隊は散開していく。バナラ車は北の橋に、克蘭ベリー車は南に向かい、単独で索敵行動に入る。ローズヒップ麾下ジャスミンを始めとした主力は、中央C7付近に進出して索敵情報を待った。

「こちら克蘭ベリー、南の橋を通過しました。敵影はありませんので、さらにH4地点まで前進致しますわ」

「こちらバナラ、北の橋を．．．待ち伏せですわ！」

バナラ車が北の橋を通過した瞬間、次々と砲弾がバナラ車の周囲に着弾する。敵は既に北部に防衛線を引き、此方が来るのを待ち構えていたようだ。

「幌市露譜にしては展開が早い、撤退しますわ。リミッター解除！橋を全速力で突っ切りますわ！」

方向転換したバナラ車が速度を上げて一本しか無い橋を一気に渡りきり、その後ろを追いかけるように砲弾が次々に着弾する。

「あつ、橋が．．．！KV—2まで居たとは危なかつたですわ。」

通過直後、一際大きな爆発の連続と共に道路橋は崩落した。敵は北部にKV—2を2

両とも配備していたようだ。他にも明らかに76mmを超える砲弾と見られる着弾が混じっていた。

「こちらバニラ。敵はKV-2が2両と新型KVを含む部隊。砲撃密度から考えておよそ5両程度と思われる」

「分かりましたわ。バニラはそのまま南下して本隊に合流、本隊はこれより南の橋を通過して攻勢に出ますわ。克蘭ベリーは敵を発見したら接触を維持しつつ、本隊が到着するまで待機。TOG2*は作戦通り隠蔽を厳にして、南を撃てるように待機ですわ」

北の橋の通過が不可能なのは明白だ。それに、報告から考えれば南の部隊の方が質に於いても数に於いても与し易いとローズヒップは判断し、南側に部隊を動かして攻勢に出た。南側の敵を素早く蹴散らし、敵に対応の暇を与えずに各個撃破すれば良いのである。

「おつかしいですわね。全然出てきませんわ」

当初の想定ではこちらを発見した敵は即座にスチームローラー作戦を仕掛けて突撃して来るはずだったのだが、I5付近に陣取った敵は防衛を固めて応射してくるだけだ。なんとか作戦通りに敵を引きずり出そうと、地形の起伏や廃屋などを利用して何度もヒットアンドアウェイを仕掛けて挑発しているのだが、一向にKV達が突撃して来る

気配が無い。

「暇ですわね」

TOG2*の車内で紅茶を飲みながら花子が呟く。他の乗員の表情からも同意する様子がかがえる。敵が前進してこないため、射撃どころか目標を捉えることも出来ないのだ。ちよこまかと忙しく動き回っているクルセイダー隊以外では、のどかなティータイムが現出していた。

「うーん、今年の幌市露譜はまるでマジノみたいですよ。北も南もガチガチに固めちゃってやりづらいですわね。今年の部長さんは随分統制力がありますのねー」

そう言いつつも挑発を続けている内に、我慢できなくなってきたのかついに前衛のKVが動き出した。一両、また一両と、釣られるように次々に前進を開始し、ついには集団がバラバラになって此方に突撃してきた。

「ようやく崩れましたわ。全車突入してやつつけますのよ！えーと、こんな言葉を知ってます？ 困んで棒で叩くですわ！」

クルセイダー隊がバラバラになったKVの隊列の間にタイミングを合わせて突入し、近接格闘戦を試みる。擬装待機していたTOG2*の乗員達も配置につき、射点について照準器に敵が見えるのをじっと待ち始めた。

「飛び出してきた割には勢いが無いようですが・・・？ 来ましたわね。目標先頭車両、

撃て」

ようやくつり出せたKVに対し、車長のリプトンの号令に合わせて17ポンド砲が火を吹き始める。装薬量の多い17ポンド砲の発砲炎はとても激しく、発砲地点を容易にばらしてしまふ一方、遠目に見ても頼もしい。だが、中々命中しない。敵までの距離もさることながら、敵が視界に対して横向きに移動していることに加え、地図上は射線が通っているように見えても意外と植生などの障害物が多く照準が困難だ。おまけに周囲を走行しているクルセイダーに当てないように気を遣いながらの射撃なので、思うようなタイミングで射撃が出来ない。段々と現状に焦りが募ってきた。

「え？リプトン様、敵後方に増援です！」

操縦席の窓を開いて双眼鏡を突き出して花子から報告が上がる。幾ら地形を盾にしていたとはいえ、激しい発砲で位置が露呈していたにも関わらず北側の敵部隊がTOG2*に対して何らリアクションを起こしていなかった時点で気がつくべきだったのだ。

「急いでローズヒップ様に報告を！」

「うむ、かかったようだな。カセグレン作戦の第二段階に入る。絵里香の第一梯団に合図を送れ。全車主砲斉射の後突入だ！」

それはちょうど、ジャスマン車が1両のKV-1の背後を取って必殺の一撃を叩き込もうとした瞬間だった。KV-1の周囲に次々と砲弾が着弾し、激しく地面を抉る。土煙が晴れた後に見えたのは、横転して白旗を揚げるジャスマンのクルセイダーと、KV-5を中心に突撃を開始した敵の第二梯団だった。

「げっ、拙いですわ！全車急いでDラインまで撤退ですわ！」

それまで一見してクルセイダー隊に翻弄される一方に見えた敵の第一梯団は、即座に増速して陣形を再編し、クルセイダー隊を囲い込みにかかった。

形勢逆転だ。クルセイダー隊は奥深くに入り込みすぎしており、今や敵の第一梯団と第二梯団に挟撃される形になっていた。敵の第二梯団は、第一梯団を巻き込むことを厭わぬ射撃を繰り返しており、撤退完了までにさらにもう一両のクルセイダーが犠牲となった。

「馬場部長、どうなさいますか」

「思ったよりも仕留められなかったが、この湿地では他に逃げ場は無い。このまま前進して敵を蹂躪する。全車後に続け」

KV-5とKV-220を中心に陣形を再編した幌市露譜高校の戦車隊は、橋を渡りローズヒップ達が逃げ込んだ北東の丘陵部へ進撃を開始した。

「あーっ、嵌められましたわ！騙されましたわ！うかつでしたわ！」

喉を紅茶で潤しながらローズヒップは考える。恐らく北の橋が落ちたのは意図的な物だ。南北両方面で守勢に回っているとこちらに錯覚させた上で、即座に部隊を移動させたのだ。統制が崩れた振りをしてバラバラに突撃を開始したのも、此方を引きずり込むための演技だったのだろう。おまけに想定していた交戦地点では思ったように泥濘化が進んでおらず、KVは自由に動いていた。

さて、既に2両を失い、防御戦闘がしやすい丘陵部に後退してきたものの、このままでは逃げ場が無いため包囲されて正面からすり潰されてしまう。一体どうしたものか。

「アッサム様は、ここ10年幌市露譜はスタート地点からフラッグ車を移動させていないと仰っていましたわ。確かにフラッグ車の姿は何処にも見えませんでしたわね。どうかして北から渡れば……」

何か良い案は無いものかと考えながら、アッサムに託されたこの演習場の資料をめくり続ける。資料の中には季節ごとの演習場の状態に関する資料もあり、その中の冬の項でローズヒップはページをめくる手を止めた。

「閃きましたわ！あのうすらデカいだけの役立たずを使えば良いのですわ。トワイニングは急いでリプトンと合流して下さいまし！ちよつと敵のフラッグ車をやつつけてきますから、他の車両はなるべく長く時間を稼いで欲しいのですわ。そちらの指揮はク

ランベリーに任せますわ」

さて、ローズヒップの指示によりクルセイダー隊による遅滞戦闘が繰り広げられる中、この動きは僅かに察知されていた。

「真由美はん」

「何？まりえ」

「さつきからクルセイダーが一両足りひんと思いまへんか？」

KV-5の無線手を務めるまりえは、早くにローズヒップ車の離脱に気がついたように、暗に何か敵の策が有るのでは無いかと車長の真由美に問いかける。

「まさか。北の橋は落としてあるから、フラッグ車には行けないわ」

幌市露譜の部隊は通行可能箇所を舐めるようにして平押しを続けており、勝手知ったる地元の演習場で敵の通過を許すような真似はしない。敵のクルセイダーがすれ違うように後方に突破することなど有り得ず、北の橋が通行不可能な以上、奥深くに籠もるフラッグ車の安全は確保されていると見て良いだろう。

「英国面があるやろう？」

「そう言われてみればジャンピングタンクなんて物もあつたし、否定は出来ないわね。部長陛下！クルセイダーが1台居なくなっているようです。迂回襲撃の可能性があるため、KV-5はフラッグ車護衛に戻りたく意見具申します」

確かに聖グロリアーナ女学院は英国の色濃い学校である。優雅さを重んじるダージリンらが率いているのなら兎も角、今回の対戦相手ならば英国面の発露たるびっくりドツキリメカを持ち込んでこちらの度肝を抜こうとしている可能性は否定出来ないかもしれない。些か飛躍の嫌があるが、そう思った真由美は部長にフラッグ車の護衛を進言し、それは即座に受け入れられた。

「うむ、分かった。そう言えばインディペンデンスも最初から姿を見せていないな。念のため、絵里香の220も連れて行け。由比のT-35は敵の襲撃を警戒せよ」

KV-5とKV-220は前進を止め、2両はスタート地点に向かって全速力で戻り始めた。それでも前線の戦力比は7対5、圧倒的に幌市露譜有利な態勢である。

一方TOG2*と合流を果たしたローズヒップは、リプトンとトワイニングに作戦を説明する。

「私に良い考えがありますわ!すぐ目の前の川ですけど、アツサム様に貰ったこつちの地図を見ると本来の川幅は狭くて、いま見えている殆どの沼地の部分は冬期には完全に凍結してしまっている場所なのですわ。今年は思ったよりも泥濘化が進んでいないようですから、ここをこう跨ぐようにTOGを入れて、あそこにインディペンデンスを入れて、後はそこから辺に生えてる木を倒してつなげてやれば、多分クルセイダーくらい

なら渡せますわ」

指示語ばかりで分かり辛いローズヒップの作戦に、当然両者は紅茶が零れるのも厭わぬ勢いで激しく反発した。沼地に戦車を沈めて渡ろうなど、前代未聞の作戦である。危険な上、成功率はお世辞にも高そうには思えず、優雅さを旨とする聖グロリアーナの戦車道とはほど遠い。

「幾ら何でも無茶な作戦ですわ！インディペンデンスを沼に沈めてそのまま白旗を揚げさせるおつもりですか?!」

「そうです、そのように文字通り泥にまみれた勝利などとても優雅とは言えませんわ。それも勝利すればの話で、とても上手くいくとは思えません。優雅を旨とする聖グロリアーナ戦車隊の一員として認める訳には参りませんわ」

「リップトン様、トワイニング様、今は私が指揮をダージン様任されておりますの。指示には従って貰いますわ。それに、私たちはこのままでは負け確ですわ。敵の作戦に完全つにはめられた無様な敗北に比べれば、泥にまみれた勝利のほうが幾分マシというものですわ」

ローズヒップ、言うときは言う娘である。リップトンとトワイニングは渋々ながら指示に従い、戦車を沼に乗り入れることにした。

最初はTOG2*だ。ローズヒップが植生から判断した本来の川の境界を跨ぐよう

沼に乗り入れる。車体を沈み込ませつつも、幅広の履帯とトルクの強いモーターが相まって、確実に目標地点に到達する。

お次はインディペンデンスだ。TOG2*の上に近くに生えていた木々を押し倒し、そのまま木々を伝ってTOG2*の上に乗れば、そこからさらに沼地へと車体を持ち入れる。インディペンデンスの重量でTOG2*はさらに沈み込み、運転席の覗視孔や搭乗口の隙間などから漏水が発生、上面排気管はひしゃげ、中からは悲鳴が上がる。インディペンデンスは沼に降りた後さらに進むおうとするが、TOG2*の様には行かず、すぐに前進が止り履帯が空回りして沈み始めてしまった。

「インディペンデンスはここまでですわね。」

後は、あらかじめ倒して置いた木々をインディペンデンスの先に放り込み、運を天に任せてクルセイダーを渡らせるだけだ。厳しい訓練の甲斐があり、皆戦車から這い出て次々と倒木を運んでいく。標準的な戦車道を嗜む女子は、二人で3tの鉄塊を起こすことが出来るという。優雅という言葉からは少々外れているが、この程度の工兵の真似事は聖グロリアーナ戦車隊の隊員にとってはお手の物だ。

「よし、行っちゃいますわよ〜!」

ローズヒップのクルセイダーは、TOG2*とインディペンデンスをさらに沼地に沈めながら渡って行き、余力で最後の木橋を粉碎しながら敵陣へ向けて全速力で突っ込ん

でいった。そんないつそ清々しいまでの後ろ姿をあつけにとられて遠目に眺めながら、少々疲れた顔でリップトンはトワイニングに語りかけた。

「さて、トワイニング様はこれからどうされますか？」

「インディペンデンスはこれ以上前にも後ろにも動けませんから、沼地のお茶会と洒落込みますわ。それに、これだけ沈み込んでいれば暫くは見つかりそうもありませんし」

「では、私もご一緒させて頂きましょうか。人事を尽くして天命を待つ。後はローズヒップが上手くやってくれることを祈るだけですわ」

二人は苦笑して車長席に戻り、漏水の続く車内でお茶会の準備を始めるが、TOG2*操縦手の花子が異議を唱えた。別に、お茶会なら浸水が続く車内では無く車外でやれとか、排水作業を手伝えとか言いたいわけではない。

「リップトン様、TOGはまだやれます！TOGに通れぬ道など有りません。この程度の沼地なんてTOGなら乗り越えて見せますわ」

普段は何も考えていないように見えるが、実際大したことを考えている訳でも無い花子が自分の意志をはっきり示すのはそれなりに珍しいことだ。少々面食らった面持ちでリップトンは考える。後をローズヒップに任せてティータイムを楽しんでも問題は無いだろうが、北の敵部隊の動向に注意を払っていなかった事に負い目が無い訳では無

い。その事に対する反省を生かすのであれば、ここはもう一働きするべきだろう。

「そう……2両戻ったと報告もありましたわね。KVの足で間に合うとは思えませんが、万一と言うこともありますわ。そうね、花子さん、TOGの力を見せて頂戴」

「はいー」

力強い笑顔で返事をした花子が操縦桿に力を入れ、アクセルを踏み込むと、600馬力のPaxman製ディーゼルエンジンが唸りを上げ、壊れた排気管から煙を噴き上げる。換装されたMEWモーターは泥の抵抗にも負けずに特徴的な幅広の履帯を駆動し、TOG2*の車体は沼を掻き分けてゆつくりと動き始めた。

「由比様、偵察の空中部員から連絡！北方よりクルセイダー1両がこちらに向かっています」

「なに？本当に来ちゃったの!?偵察に出た空中部員は全員配置に戻って。雑兵ちゃん、やられないよう頑張って！」

間もなくして、クルセイダーが勢いを付けてT-35に突っ込んできた。

「敵フラッグ車発見！このままやっちゃいますわよ！」

先手を取ってクルセイダーが発砲するが、既にT-35は車体正面を向けており、砲弾は虚しく音を立てて正面装甲に弾かれた。

「あらら？この距離で抜けないなんて変ですわ。それになんか頭にごちやごちや付いてますわね」

そう、このT―35はただのT―35では無い。正面装甲が70mmに強化され、各部の避弾経始が強化された1939年型だ。しかも、砲塔上部にはTPUAO（戦車用砲撃制御装置）が搭載されており、効果的に指揮管制された主砲と副砲がクルセイダーの接近を阻止していた。

「くっ、中々やりますわね。これは思ったよりも時間がかかりそうですわ」

ローズヒップの顔が焦りに歪み、激しい機動で手にした紅茶が派手にこぼれる。目の前のT―35はその鈍重そうな見た目に反し、巧みな機動で中々側面を取らせてくれず、逆に5基の砲塔群から放たれる砲火はローズヒップのクルセイダーを少しずつ追い込んでいた。

「ごちらリプトン、H4地点正面に新型KV2両！このまま交戦します」

リプトンが声を上げ、車内に緊張が走る。無事沼地を突破して敵の増援を防ぐべく南下していたTOG2*の正面に、KV―220とKV―5が現れたのだ。ローズヒップはT―35相手に苦戦中であり、このまま通過を許せば敗北は確定してしまうだろう。リプトンは即座に花子にTOG2*を廃屋の陰に寄せるよう指示し、射撃の機会を待つ

た。敵はこちらに気づいておらず、演習道路をまつすぐ西進してフラッグ車の救援にかおうとしている。いかにTOG2*が強力な戦車とはいえ、ともに相手をすれば勝ち目は無い。まずは待ち伏せによって、確実に片方を葬る事を選択した。

「まずはKV—220から。よく狙え。撃て！」

永遠にも思える時間、十分に敵を引きつけて放たれた17ポンド砲弾が真つ直ぐに車体の側面に吸い込まれると、KV—220は黒煙を吐きながら僅かに震えて停止し、同時に白旗が揚がった。

「やった！」

車内が一瞬歓声に沸き、砲手の港は思わず手を握りしめた。なんせ、TOG2*に乗ってからの初撃破である。それを横目に即座に装填手の杉田が次の砲弾を装填する。僚車が撃破されたことでこちらに気がついたKV—5が向かってきており、発砲を続けるものの180mmもの厚さを誇る正面装甲にさしもの17ポンド砲も次々と弾かれてしまう。KV—5も負けじとこちらに107mm砲を応射し、盾にしている廃屋がたちまち崩れ始めた。

「装甲が厚すぎますわ！」

聖グロリアーナで最高の威力を誇る17ポンド砲でもKV—5の正面装甲に歯が立たず、港が思わず苛立ちを口に出すと、思わぬ事に花子から返事が返ってきた。

「・・・R2D2！R2D2を狙って下さい！」

KV-5の車体正面には無線手が収まる機銃塔が付いており、その装甲厚は120mと他の部分よりも薄い。円筒形のため端を狙えば弾かれてしまうが、ちゃんと真ん中を狙えば他の箇所よりも容易に貫通するため、KV-5の弱点の一つと言える。この部位の形が映画スターウォーズに出てくるR2D2と言うロボットの様子に似ていることから、World of Panzersでは一般にR2D2と呼ばれているのだ。とは言え、誰もがそのことを知っているわけではない。お嬢様学校である聖グロリアーナではなおさらだ。照準器から目を離さぬまま、港は叫び返す。

「R2D2って何ですの!? R2D2って何ですの!?」

「知らないんですか!? スターウォーズに出てくるドロイドですよ！」

R2D2を知らないなんて！驚きと共に花子が叫びを返すが、車内は最早場違いな雰囲気にも包まれていた。

「スターウォーズ？聞いたことがありませんね、アメリカの新兵器でしょうか？」

「ドロイドというのはスマートフォンの種類のことでないのですか？」

「確か、植民地人共の間で流行っている小説だとか・・・」

「スターウォーズは英国淑女の嗜みですよ!？」

困惑を含んだ花子の叫びが車内に虚しく響き渡る。いくら英国にスターウォーズ

ファンが多いとはいえ、それは無い。聖グロリアーナ女学院、最近でこそ庶民の入学も多いが、歴としたお嬢様学校である。庶民には有名な大作SF映画を知らないのも仕方が無いことなのだ。多分。

一方、T-35とクルセイダーの戦いも佳境に差し掛かっていた。T-35は巧みな操縦と火力の運用によりローズヒップの攻勢を躲し続けていたが、唐突にその終焉が訪れた。雪解けで普段よりもぬかるんだ大地の上で激しい機動をし続ければ、大量の泥濘が足回りに入り込む。T-35の足回りは分割構造と装甲スカートのおかげで泥が詰まりやすく、ついに片側の履帯が動かなくなってしまうのだ。

「っ！履帯が動かない！」

操縦手の雑兵ちゃんが悲痛な顔をして叫ぶが、その隙を見逃すローズヒップでは無い。
い。

「止まった？今ですわ！」

急加速して砲弾をギリギリで躲し、ローズヒップのクルセイダーがついにT-35の側面に回り込んだ。そして一瞬の刹那、クルセイダーの6ポンド砲が火を噴いた。敢闘敢え無く、ついにT-35から白旗が揚がったのだった。

「ま…真由美せん…ぱ…い、ごめんさい、負けちゃいました…」

「フラッグ車の撃破を確認！聖グロリアーナ女学院の勝利！」
審判の宣言によつて練習試合は終わりを告げた。聖グロリアーナ女学院の勝利である。

第5話に続く

第5話「札幌の会見」

激しくも熱い試合が終わり、双方が集い挨拶を交わす。戦車道の試合は礼に始まり、礼に終わる。挨拶は実際大事だ。

演習場にぼつんと生えた棗の木の下に設けられたティーテーブルに、勝者であるロズヒップと、敗軍の将である幌市露譜高校の馬場部長は相まみえていた。少し離れたところを目を向ければ、他の面々も思い思いの組み合わせで同じようにテーブルを囲んでいる。つい先ほどの試合中までは不倶戴天の敵同士であったが、試合が終わればもう友達である。いつしか語る言葉も打ち解けて、双方ロシアンティーを傾けながら武勇を称えあっていた。

「今回の戦術はお見事だったのですわ。まさか、KVにクルセイダーが包囲される事があるなんて思いもしなかったのですわ。結局、最後までお釈迦様の掌の上に居たような気分だったのですわ」

クルセイダー隊は聖グロリアーナ女学院戦車隊の獵犬である。自らが獲物を追い立てる獵犬であることを自認している彼女たちにとって、獲物と見做していた相手に追

立てられる羽目になったのは、良い経験であっただろう。

「いや、一年生でありながらクルセイダー隊を任せられるだけの事は有る。見事な統率と判断力であった。さらに経験を積みめば、先代のアールグレイ殿に勝るとも劣らない指揮官になれるだろう。それに、最後に賭けに勝ったのは貴方ではないか。まさか、聖グロがあんな事をするとは想像の埒外であったがな」

試合そのものは、最後まで幌市露譜の作戦通りに推移した。編成と地の利を生かし、敵を欺き、判断ミスに付け込む。完璧と言つて良いほどに決まった作戦は、最後の最後で戦車を沈めて橋にするというローズヒップの暴挙によりあえなく失敗した。

しかし、馬場部長は姿勢を正し、真剣な目つきで問いかける。

「だが、聖グロリアーナ女学院は優雅さを旨とする校風。紅茶を零して勝利する位ならば、紅茶を一滴も零すことなく敗北することを選ぶ、それを伝統とするはずだ。今のダーズリンはどうか知らぬが、OG会は貴方を許しはしないだろう。幸い聖グロリアーナとプラウダ、延いては我が幌市露譜との関係は良好だ。どうだ、いざとなったら私の下に来ないか。その手腕を我が幌市露譜あるいはプラウダで生かして欲しい」

ローズヒップは特に悩む素振りも見せずに即答する。

「お言葉は嬉しいですけど、ダーズリン様が何とかしてくれまますから大丈夫ですわ!」
「そうか、今代のダーズリンは随分と信頼されているのだな。まあ、あの場外戦術の得

意な腹黒格言策士のことだ、OG会相手にも上手く立ち回るだろう」

基本的に常に表情が硬い馬場部長も、僅かに笑みをこぼした。

「所で、うちに良い軽戦車がある。T-50-2と言うのだがな。とても良い軽戦車なのだが、こちらのドクトリンでは持て余していてな。貴方なら大いに役立ててくれるだろう。今日の記念に差し上げようと思うが、どうかな」

中々魅力的な提案ではあるが、ローズヒップの心は決まっていた。

「厚意はありがたいですけど、それもお断りしますわ。私クルセイダーが大好きなのですわ！」

「・・・と、こんな感じで大勝利だったのですわ！」

所変わって、戻った先の聖グロリアーナ女学院の学園艦。ダーズリン達の前での遠征報告会である。ダーズリンを中心に、アッサム、オレンジペコを始めとした名前持ちが並び、後ろには大勢の一般隊員もティーテーブルを囲んでいる。ダーズリンとアッサムは一見平静を保ってローズヒップの報告を聞いているが、そのこめかみには青筋が走り、目が笑っていないのは明白だ。オレンジペコやニルギリ達も苦笑いを隠せていない。ルクリリはいつもの通り澄ました顔でティーカップを傾けているが、何の事は無い、居眠り中である。

「単に勝つて帰ってきたと言うのなら褒めてあげたいけれど、これは困ったものね。やっぱり大洗に連れて行けば良かったかしら」

ダージリンが小さな声でアッサムに耳打ちすると、アッサムも僅かにうなずいて同意を返す。

今回の練習試合、ダージリンとしてはローズヒップに経験を積ませるのが目的であつて、必ずしも勝つ必要は無かつた。敗北してこそ学ぶことの出来ることも多いのである。その点、今回の試合経過からは学ぶべき事は多かつた。ローズヒップはああ見えて聡明であるから、今回の練習試合の戦訓をしっかりと汲み取ってくれるであろう。その上、勝つて帰ってきたとなれば、普通は文句のつけようが無いはずなのだ。問題は、勝ち方である。

「ローズヒップ、まずは今回の遠征はお疲れ様。今回の試合の経過はとても興味深かつたわ。隊長として部隊を率いる上で、色々と学んだことも多かつたでしょう。それに、ともすれば初めから勝ちを諦めがちな現状にあつて、勝利を諦めない姿勢は賞賛に値するわ」

賞賛から始まったダージリンの言葉に、ローズヒップは相好を崩す。ローズヒップ自身余り自覚はしていないのだが、優雅さを重んじる校風とOG会の干渉による戦車保有の制限から、端から勝利を放棄したあきらめの姿勢が蔓延していることに不満を覚えて

いたのだ。だが、上げてから落とすのは英国紳士の定番技法だ。ティーカップを置いたダージリンの雰囲気が変わり、続けて厳しい口調で言葉を走らせる。

「でも、それを差し置いても今回の勝ち方は頂けないわ。ローズヒップ、聖グロリアーナの戦車道は？」

「いかなる時も優雅……ですわ……」

流石のローズヒップも叱責されていることは理解したようで、先ほどとは打って変わって落ち込んだ様子でダージリンに答えを返す。

「そう、私たちがしているのは戦車道であつて戦争では無いわ。どんな手を使つても勝てばいいという訳では無い、勝利よりも大切な物がそこにはある。元々クルセイダー隊の戦い方は少しばかり優雅とは言えない所があつたけれど、今回はやり過ぎよ。特に、TOGとインディペンデンスの乗員を危険に晒したのは頂けないわ。そこはよく反省なさい」

一歩間違えれば戦車と乗員諸共に泥の中に沈める事になつていたので当然の指摘であろう。今更ながらそのことに気がついてローズヒップは項垂れる。

「善く戦う者は勝ち易きに勝つ者なり、今後は私達らしい優雅さを保ちつついかに勝利につなげるかを考えなさい。それが無理だと言うのなら聖グロリアーナで戦車道続ける意味は無い。黒森峰がプラウダにでも転校することをお勧めするわ」

その後も些か厳しい指摘が続き、報告会は解散となった。気落ちしたローズヒップはクルセイダー隊の隊員に囲まれて慰められながら戻って行き、ノーブルシスターズの面々だけが最後に残った。

ほつとため息を吐き出してアツサムが発言する。

「練習試合の目的は十分達成しましたが、最後がいきませんでしたね。ローズヒップもまだ1年ですから仕方方の無い面もあるかと。OG会のお姉様方の耳に入らないよう、まずは箆口令を敷きましょうか。後はG16に情報操作を依頼するしか有りませんね。それから、プラウダと幌市露譜にも手を回して……」

「アツサム、そんなことはどうでも良いの」

「ダーズリン?」

アツサムが疑問符を顔に浮かべてダーズリンに問いかける。そう言う大つびらに出来ない話をするために残ったではなかったのか?

「TOGを使いこなすにはローズヒップはまだ未熟だったわ。本当なら、私のTOGがその逞しい17ポンド砲でマチルダでは歯が立たない重戦車をちぎっては投げ、ちぎっては投げ、華々しいデビュー戦を飾るはずだったのに。そして、頑迷なマチルダ会のお姉様方も強さと優雅さを兼ね備えたTOGの働きに甚く感激して、マチルダ会をT

OG会に改名、マチルダを全てTOG2*に入れ替える、ついでに西呉王子からチャーチルブラックプリンスも召し上げる・・・、そんな計画が脆くも崩れ去ってしまったわ。あまつさえ、あの美しい戦車を泥の中に放り込んで汚してしまうなんて！こんなことからHome^本 Fleet^{艦隊}を大洗に連れて行って、私自ら指揮を執るんだったわ」

涙乍らによく分からない妄想を口にするダーズリンに、あきれた様子のアツサムはかろうじて言葉を絞り出す。

「大洗にはローズヒップを連れて行くべきだったと思いますよ」

アツサムが思うに、能力は兎も角として、問題行動の多いローズヒップはまだまだダーズリンの下で動かすようにしなければ聖グロリアーナ女学院の名に傷が付いてしまふ。延いては、OG会の過剰な干渉を許すことになりかねないのだ。特にクロムウエルの投入を控えた今は慎重に動かなければ。

オレンジペコも困った顔をしながら、一応突っ込みを入れることにした。毎度の事ながら、この上司の相手をするのはKVの1個大隊を相手にする以上の困難を伴うように思われる。

「先ほどの孫子でしたね。それから、TOGはダーズリン様ではありませんよ」

報告会の後、花子らTOG2*とインディペンデンスの乗員達は戦車の洗車の続きに

戻っていた。この2両は湿地帯に完全に沈んでしまったため、洗浄の手間がクルセイダー隊とは比較にならないのだ。

「履帯に詰まった泥が中々取れませぬ〜」

操縦手の花子と装填手の杉田が高圧洗浄機で履帯に詰まった泥を掻き出すが、多数の転輪と装甲カバーの奥に詰まった泥は中々落ちにくい。

「車内の洗浄は終わりましたから、そちらを手伝いますわ」

ハッチから車長のリプトンが顔を出す。車内にもハッチの隙間などからだいぶ泥水が流れ込んでいたが、こちらはもう終了のようだ。砲手の港も機関室から這い出てきて合流する。

「リプトン様も相変わらず硬いですよね〜。ルクリリ様程とは言わなくても、もう少し砕けても……」

そこにローズヒップを先頭にしたクルセイダー隊の面々がやってきた。

「クルセイダー隊の方は終わりましたからお手伝いに来ましたわー」

「あ、ローズヒップ様、クルセイダー隊の皆様ありがとうございます」

先ほどのダージリンの叱責が多分に堪えたか、罪滅ぼしの気持ちもあるのだろう。ローズヒップの的確な指揮の下、TOG2*とインディペンデンスに群がって車体の清掃を手伝い始めた。

清掃作業も終盤に差し掛かった頃、やや俯いたローズヒップが合間を見てリプトンとトワイニングに声を掛けた。

「その・・・リプトン様、トワイニング様、あの・・・」

いざ声をかけてみると、頭の中がぐちゃぐちゃになって、言葉が出てこない。その場の勢いで彼女たちを危険に晒してしまったこと、聖グロリアーナらしい戦いをさせられなかったこと、反対を押し切って強行したことを二人はどう思っているか・・・頭の中で色々なものが駆け巡って言葉にならず、ただ二人の前で俯いて声にならない声を上げるだけになってしまった。いつものローズヒップらしくも無い。

そんなローズヒップの前にリプトンとトワイニングは互いに顔を見合わせ、そして二人でローズヒップの肩を抱いて語りかける。

「言いたいことは分かります。今は何も仰らないでいいですわ」

「私も作戦には反対しましたが、あの勝利の感触自体は好ましく思いました。これからも一緒にダーズリン様をお支えしましょう」

顔を上げたローズヒップの目には僅かに涙が浮かんでいた。

そんな姿を遠く物陰から紅茶を片手に見守る者がいた。言わずと知れたダーズリンである。

「ふふ、これなら私がフォローする必要は無かったわね」

「ローズヒップ様はなんだかんだでダーズリン様のお気に入りですからね」

もうすぐ今年の戦車道大会の抽選会だ。成長した彼女たちは、今年の戦車道大会でどんな活躍を見せてくれるだろうか。そして、大洗の好敵手も。